

## 文禄・慶長の役の伝承

——『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』——

一瀬 千恵子

はじめに

豊臣秀吉が大明・朝鮮を征服しようとして朝鮮に大軍を送った文禄・慶長の役（一五九二～一五九八）は秀吉の死とともに幕を閉じた。この戦争は秀吉の死後から今日に至るまで、さまざまな評価をうけ、秀吉像も転変を重ねてきた。

本研究は、近世初期から後期に至る間、文禄・慶長の役を描いた朝鮮軍記物が、その時代の風潮のなかで、戦争や秀吉の評価、対朝鮮・中国認識がどのような揺れを見せながら継承されてきたのかを探るものである。

これまで朝鮮軍記の先行研究は、阿部一彦氏（一九九

六）が『太閤記』を中心にして、近世初期軍書諸本との継承関係を詳述している。<sup>1)</sup> そのうちの『太閤記』と『朝鮮征伐記』——四大捷の行方とその展開——<sup>2)</sup> では、堀正意の『朝鮮征伐記』が『太閤記』を継承しながらも、〈明・朝鮮〉側の動向が大量にしかもかなりの精度で『朝鮮征伐記』には採用されていると指摘し、その史料を『懲毖録』であると見ている。筆者は、これは、誤りであると考える。後述するように、『懲毖録』の流入の時期と『兩朝平攘録』と堀正意『朝鮮征伐記』の引用語句の検討から、『朝鮮征伐記』が『兩朝平攘録』を継承していることは明らかである。井上泰至氏（二〇〇七）は、『朝鮮太平記』を中心に『朝鮮軍記大全』と比較しながら、『朝鮮太平記』の日本、朝鮮、中国側の記述の取材源を明らかに

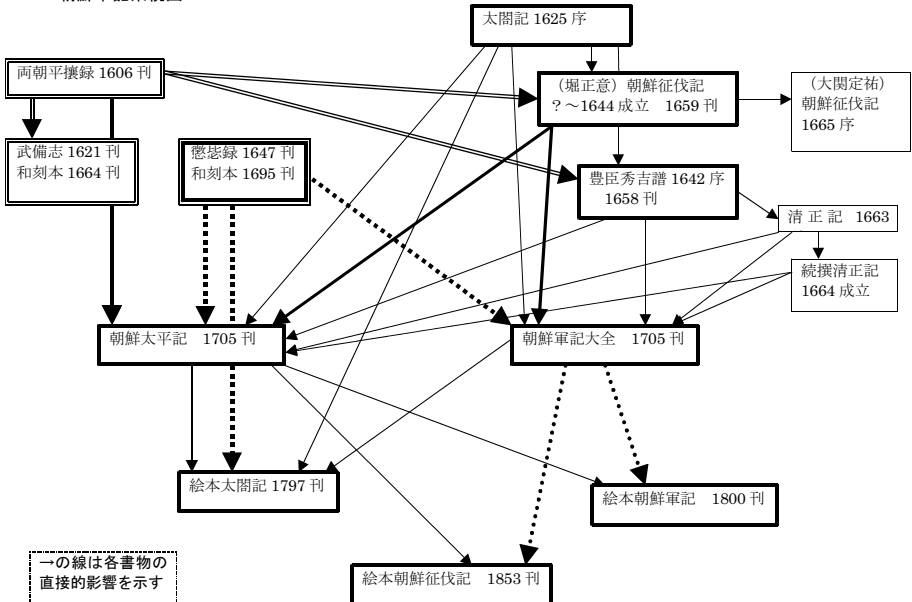
しているが、朝鮮・中国側の記事の取材源としては『懲毖録』と『両朝平攘録』がその主なものであると指摘している。<sup>3)</sup>

本論文では宝永二年（一七〇五）に出版された、『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』を中心にして、江戸前期の朝鮮軍記作者が秀吉の朝鮮出兵をどのように評価したのかを探る。『太閤記』から『朝鮮征伐記』、そして『朝鮮軍記大全』・『朝鮮太平記』へと伝承される時、何が強調され、どのような視点が新たに加わったのか、考察する。

はじめに、朝鮮軍記がどのように継承されてきたのかを概観してみよう。資料「朝鮮軍記系統図」は『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』の成立に先行する作品と、以後の作品への影響関係を示したものである。

文禄慶長の役の記録は、参戦武士の体験の聞き書、覚書、報告書、日記等、従軍僧侶の見聞談などに始まり、写本の形で表された。小瀬甫庵の『太閤記』（寛永二年・一六二五序）はそのような短編記録類を総合的にまとめた最初の軍記といわれている。その後、明国の諸葛元聲著『両朝平攘録』<sup>4)</sup>（萬曆三四年・一六〇六刊）と茅元儀著『武

朝鮮軍記系統図



備志』(天啓元年・一六二一刊)が移入され、明国側から見た戦争情報もたらされた。寛文四年(一六六四)には『武備志』和刻本も出版された。『武備志』の文禄・慶長の役に関する事項は『両朝平攘録』を抜粋してまとめられたものである。

寛永年間には堀正意(天正一三年・一五八五生く寛永一九年・一六四二没、五九歳)が『朝鮮征伐記 九卷』を撰した。この書物には、『両朝平攘録』を訳したと推定される箇所が多くみられ、明・朝鮮に関する記述は、『両朝平攘録』に依拠している。堀正意の死後、万治二年(一六五九)に、挿絵入りで版本が刊行された。中村榮孝氏は堀正意『朝鮮征伐記』が版本になる過程で一部削除された部分があることを指摘し、「刊行関係者が徳川家をはばかったことによるものかと推察されなくてもない」と、控えめに類推している。<sup>5)</sup>

大関定祐『朝鮮征伐記』は、堀正意の『朝鮮征伐記』の大部分を継承して、大関定祐が寛文五年(一六六五)に著したもので、写本としてのみ流传している。ここには、堀正意『朝鮮征伐記』版本で削除された部分も収められている。<sup>6)</sup>

『豊臣秀吉譜』(寛永一九・一六四二序文)は、徳川幕府の命により林道春羅山が編纂したものである。依拠した書物として、先行する『太閤記』と『朝鮮征伐記』を挙げるができる。くわえて、『朝鮮征伐記』に見られない『両朝平攘録』の記事を引いている箇所がいくつもあり、羅山は『両朝平攘録』から直接取材していることがわかる。

なお、『清正記』は加藤清正の一代を描いた軍記物であるが、序文には清正先祖のことは加藤美作守という人が書き置き、清正若年から天草までの働きは古橋又助が書き置き、朝鮮陣中のことは下川兵太夫・木村又蔵という者が書き置いたと記されている。寛文三年(一六六三)に刊行された『清正記』の文中には『豊臣秀吉譜』からの引用が明記されている。翌年寛文四年(一六六四)、加藤家臣某によって『続撰清正記』が撰せられた。序文には敢えて姓名を詳らかにせず、「先集の誤を撰び之を改め、足らざる事をば、之を続き」という執筆意図が記されている。

文禄・慶長の役当時、朝鮮の宰相であった柳成龍の撰した『懲毖録』(一六四七く四八頃刊行か)<sup>7)</sup>が日本に移

入されて、戦役に関する情報はいつそう充実した。『懲愆録』が日本へ渡った最も古い記録として、藤本幸夫氏は宗家文庫蔵『天和三年目録』の調査から、日本には天和三年（一六八三）の時点ですでに渡っていたことを報告している。管見の限りであるが、『懲愆録』を読んだ記録で最も古いものは、貞享二年（一六八五）、貝原益軒の読書記録「玩古目録」<sup>(10)</sup>である。「貞享二年 五六歳、懲愆録 二冊 記平安城四邊神祇守護皇都 闕作者名」と記されている。その後、元禄八年（一六九五）に京都の大和屋伊兵衛から和刻本『朝鮮懲愆録』が出版された。これで文禄・慶長の役に関わる日本・朝鮮・中国三方国の情報も、出版物として揃い、多くの人々に共有されることになったのである。

やがて、朝鮮の『懲愆録』、明の『両朝平攘録』、日本の『豊臣秀吉譜』、『朝鮮征伐記』等の史料をもとに、釈姓貴著『朝鮮軍記大全四〇巻』（宝永二・一七〇五刊行）と馬場信意著『朝鮮太平記三〇巻』（宝永二・一七〇五刊行）が出版された。ともに、三〇巻く四〇巻という大部の著作で、青表紙に大本という体裁、すなわち、然るべき内容の学問的な本としての体裁で作られている。両書に

おける『懲愆録』の影響は大変大きく、朝鮮に関する情報もいつそう詳細になった。たとえば、『両朝平攘録』に依拠した『朝鮮征伐記』においては、朝鮮の水軍将「李舜臣」は「李統制」、「李順臣」<sup>(11)</sup>と記し、『豊臣秀吉譜』には「李統制」とのみ記されていたものが、『懲愆録』後に成立した『朝鮮軍記大全』、『朝鮮太平記』には「李舜臣」と正しく記され、戦闘の様相や人物像が詳述されるようになり、その後の朝鮮軍記には必ず登場するようになった。

文禄・慶長の役に関する説話は、講談や歌舞伎においても継承されてきた。『朝鮮軍記大全』や『朝鮮太平記』に講談の説話が加わり、『絵本大閣記』全四七巻（寛政九年・一七九七）享和二年・一八〇二出版）が成立した。

『朝鮮軍記大全』刊行の一〇〇年後に、その縮小版ともいふべき、秋里籬島『絵本朝鮮軍記一〇巻』（寛政二二年・一八〇〇刊行）が挿絵付き漢字平仮名混じり表記で出版された。さらに、その五〇年後、鶴峯彦一郎校正『絵本朝鮮征伐記』全二〇巻（嘉永六年・一八五三刊行）が挿絵付き漢字平仮名混じり表記で出版された。『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』が出版されてから一五〇年

後にあたる。『絵本朝鮮征伐記』には『朝鮮軍記大全』の本文に加えて、『朝鮮太平記』から継承した「清正征東使伯寧將軍を擒にする事」、「黒田甲斐守長政武勇の事」、「黒田長政が先勢狼川にて軍の事」、「小早川隆景晋州城をかこむ事」等、諸將の武勇伝が挿入されている。

『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』が上梓して間もなく、両書の版元は重版・類版に関わる係争を起こしている。『朝鮮軍記大全』版元の大和屋伊兵衛が勝訴し、敗訴した『朝鮮太平記』版元 of 山岡四郎兵衛は高い板賃（板木使用料）を払って出版に至っている。<sup>12)</sup> 宝永二年という時期に、三〇巻く四〇巻という大部の書物がそろって出版されたことは、当時の軍記出版の隆盛を物語るものである。長友千代治氏（一九五七）は近世になって軍書がしきりに制作されて、庶民の間でよく読まれ、宝永頃から享保期にかけて全盛期を迎えたが、京都では馬場信武・信意の親子はその代表的作者であったとし、その背景には出版書肆の強い関与があり、読者に好んで読まれる材料を探し求めて、著作の制作を大方企てて、促進したことを指摘している。<sup>13)</sup>

それでは、朝鮮軍記はどのくらい普及したのか。その

一端を探るために、現存する古典籍の所蔵状況をインターネットで検索した。堀正意『朝鮮征伐記』は一六点、釈姓貴『朝鮮軍記大全』は三〇点、馬場信意『朝鮮太平記』は二五点、秋里籬島『絵本朝鮮軍記』は一点、鶴峰彦一郎『絵本朝鮮征伐記』は九点、『絵本太閤記』は一〇二点の所在がヒットした。このうち二六点を実見調査している。『絵本太閤記』の現存数はこの書がいかに人気を博したかを物語る。『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』の現存数もある程度の読者数を得たことを示すといえる。資料「朝鮮軍記諸本の所在」は、国文学研究資料館データベース「日本古典籍総合目録」をもとにして一覧表に整理したものである（本稿末参照）。『絵本太閤記』は紙面の都合上、調査したもののみを掲載した。

蔵書印や書き込みから旧蔵者が明らかにしたものがある。No.104の宮城県図書館伊達文庫所蔵『朝鮮征伐記』には、「壁」という蔵書印が押されているが、仙台藩五代藩主、伊達吉村（一六八〇生―一七五二没）の蔵書印で、一七〇〇年から一七五〇年頃の集書かと推定される。No.207の酒田市立光丘文庫所蔵『朝鮮軍記大全』は出羽の大地主、本間家が集書したものである。第三代当主光丘

の長子で、第四代当主の光道（一七五六―一八二六没）は長崎、京都、大阪で書籍を大量に買い求め、文化六年（一八〇九）には書物庫を建築している。内閣文庫所蔵のNo.204『朝鮮軍記大全』とNo.303『朝鮮太平記』には「徳川家達献本」という付箋が貼られている。徳川家達（一八六三生―一九四〇没）は徳川宗家十六代当主である。東京都立中央図書館加賀文庫に所蔵されているNo.410およびNo.411の『絵本朝鮮軍記』には「堺川尻山家屋利兵衛」という丸印が押してある。堺山家屋利兵衛とは江戸時代から続く商家と見られる。三康図書館所蔵のNo.50『絵本朝鮮征伐記』は「常宮御殿」という角印が押されているが、竹田宮家の旧蔵書である。

## 第一章 作品について

### 1 『朝鮮軍記大全』について

『朝鮮軍記大全』狩野文庫所蔵本、三八巻附三巻二三冊、四九七丁、刊本、

ルビ付き漢字片仮名書、一一行

刊記…宝永二（一七〇五）乙酉八月新板／京都 大和屋伊兵衛／江戸 出雲寺店在本、

著者…序文末「洛東山舊擔爰甫自題」、印記「釈姓貴」、

序目1巻…大序・目録・地図・朝鮮州府縣の名目  
附録2巻…朝鮮国の開闢以来の歴史

桑田忠親氏（一九六五）は「江戸時代における太閤記の著述と出版」のなかで、「朝鮮戦役関係のまとまった記録」として『朝鮮軍記大全』『征韓録』『朝鮮征伐記』『朝鮮征討始末記』等を紹介しているが、『朝鮮軍記大全』成立の史料までは追求していない。<sup>(14)</sup>

『朝鮮軍記大全』の著者釈姓貴については、全く解明されていない。序文の「洛東山舊擔爰甫自題」という署名から推察すれば、京、洛東に住まう僧侶であったかと考えられる。また、「舊擔爰甫」という名は「舊爰擔（キョウケン）ぎ（キョウケン）たる甫」と読むこともできるが、「以前、刀を担いでいた男」という意味にもとれることから、武士出身者であることを暗示するものではないだろうか。「釈姓貴」という印記にも、貴い家すじの出身であることをことさら示そ

うとする意思が伺われる。横田冬彦氏（二〇〇二）は、元禄文化の担い手はもと武士あるいは牢人の家の出自のものが多く、主家の敗北、家の浮沈によつて牢人になつて都市に滞留する者は、寺僧、神主、医師、寺子屋師匠というような知識人となつたと指摘している。<sup>15)</sup> 釈姓貴もそのような境遇の一人であつたかと想像される。序文から作者の執筆意図を探つてみよう。

豊臣秀吉朝鮮征伐、事理ノ間、其論ズル所ノ是非ニ於テハ、先輩幾人カ其説ヲナス。…（中略）…後世幾人カ其筆ヲ勞セルヤ、書肆ノ梓スル者ニ於テ寔ニ多シ。夫今世見ニ在ル所ノ太閤記、太平記、続太平記、九州記、清正記、同日記等ハ其大概ヲ載スル者ニシテ、然モ其記スル處同事異論ノ一決シガタキアリ。或ハ自己ノ旧郷心意ノ向フ處、鼻眞ノ沙汰ニアラザレバ、或ハ他人一偏ノ億説ニ因リテ、其義曾ヨリ正確ナラズ。…惟リ朝鮮国、柳左相成龍カ懲毖録ト本朝堀正意ガ征伐記アリ。ソノ載スル處簡要ニシテ書スル處質直ナリ。…今我記スル所ハ林翰林ノ台命ニ應テ書スル處ノ豊臣家譜ヲ以テ其場ヲ定ルノ

幹楨トシ、懲毖録、征伐記ヲ取テ左右翼ヲ張り、…其外明記、小説、和語、雜篇、一トシテ見ル處有ルヲバ盡クコレヲ摘取ス。且又我ガ幼歳ヨリ好ム処ノ兵書、伝へ受ルノ法術ヲ以テ、コレヲ折衷ス。…（後略）…

（『朝鮮軍記大全』序文。下線強調は筆者による。以下同様。）

「林翰林の台命に應じて書する所の豊臣家譜を以つてその場を定むるの幹楨とし、懲毖録、征伐記を取つて左右翼を張り…（中略）…其のほか明記、小説、和語雜篇、一つとして見る所有るをば、尽くこれを摘取す」と、引用史料を明記している。和漢の文献を縦横に読むことのできた知識層であることには違いない。

「鼻眞ノ沙汰」ということに関しては、本文卷之七「王城ノ途中郡県ヲ陥ル事」でも述べている。王城を指して清正と先陣を争う小西が、後から来る清正軍を遅滞させるために、手下の者に渡し船の纜を切らせたという説話である。これは『太閤記』や『清正記』にも記されている説話であるが、釈姓貴は異論を唱える。船が無くなつ

た事態は朝鮮国王李暎が平壤に趣く時、助防将元豪に指示した戦術であつて、賊の追跡を阻むために船を焼かせ、さらに、民家を壊して筏を作らせないようにと、竹木も切り払わせたはずだとし、「是等兵ノ常談タリ」「察スルニ、清正ヲ鼻眞ノ俗説ヨリ、彼方遲滞ヲカクサン為ニ、好事ノ者ノ説造ルト見ヘタリ(卷七4)」と批判している。そして、「総ジテ朝鮮征伐ノ旧記、…(日本軍が王城に至るまでのことを)彼国ノ事実一ケ条モ記セズ。殊二月ノ違ヒ、日ノ有無、三書ハ三等ニ相負キ、諸記各一決ナシ。故ニ今、彼国記ノ誌ス処ト、我邦ノ旧記ノ間ヲ勘会シテ、其中ヲトレル処ナリ。其他事跡モ亦コレヲ以テ、後觀ノ者校正スベシ(卷七4)」と記す。史実を追究するには既存の我が国の書物では不十分であるとし、「彼国記ノ誌ス処」、すなわち、朝鮮の書物『懲毖録』に依拠するとしている。

長友千代治氏が、近世通俗軍書について、「正確な歴史記述をもつて、庶民の亀鑑とすることが軍書制作の基本理念であつた」と指摘しているように<sup>(6)</sup>、积姓貴は正確な歴史を著述するということが執筆の基本姿勢であつたといえる。『○○大全』という書名にも、すべての情報を

網羅して書くという积姓貴の意気込みが表れている。

## 2 『朝鮮太平記』について

『朝鮮太平記』盛岡公民館所蔵本<sup>(17)</sup>、三〇卷一五冊、六七九丁、刊本、

ルビ付き漢字片仮名書、一二行

著者…宝永二年七月中元日 洛下止戈士 馬場信意

自序

刊記…宝永第二乙酉歲仲秋下旬

武城 日本橋南一丁目 須原氏茂兵衛

同 増上寺表門前 玉置次郎兵衛

皇都 二条通御幸町西江入町 山岡四郎兵衛

馬場信意<sup>(18)</sup>は寛文九年(一六六九)に生まれ、享保一三年(一一七二八)没。京都の人、軍記作者である。別名山川素石、柳隠子・羅月堂と号す。医者・軍記作者である父、馬場信武(？)正徳五年・一七一五没)の影響で、幼より史書・軍記に親しみ、連歌にも通じていた。宝永頃から日本の軍書の考究・訂正を旨として、新しく軍書



の書き直しを行った。刊行した書物は多数にのぼり、『南  
朝太平記』『西国盛衰記』『朝鮮太平記』『二川随筆補』等  
がある。

『朝鮮太平記』は『朝鮮軍記大全』と比べると、『朝鮮  
征伐記』や『兩朝平攘録』から引用した外交文書をより  
多く掲載している。史実の追求に関心が置かれていたこ  
とは確かである。それとともに、大小の武将たちの出自  
や家系、武勇伝等の記述が詳しい。また、娯楽性も加味  
されており、『朝鮮軍記大全』には無い説話が多数収めら  
れている。加藤清正が女真族の居住地オランカイ（女直  
・兀郎哈）に侵入した後、「濟州」というところで富士山  
を見たという説話もそのひとつである。「坤（南西）ノ  
方ニ当テ日本ノ富士山近ク見ユ」（『朝鮮太平記』巻八<sup>12</sup>）  
と記している。『朝鮮征伐記』にはこの記述は無く、『清  
正記』<sup>(18)</sup>（巻二）からの引用と見られる。その後<sup>(19)</sup>に成立し  
た『繪本太閤記』<sup>(19)</sup>（一七九七〜一八〇二出版）、『繪本朝  
鮮軍記』<sup>(20)</sup>（一八〇〇出版）、『繪本朝鮮征伐記』<sup>(21)</sup>（一八五  
三出版）には、挿し絵とともに「富士山」説話が必ず記  
述されるようになる。

## 第二章 戦争評価

### 1 『朝鮮軍記大全』の戦争評価

釈姓貴は太閤薨去の記述において、秀吉の生涯を総括  
している。

盛者必衰ノ理ハ、人間モトヨリ不通ノ習ト云ヒナカ  
ラ、…伏見ノ新城ニシテ薨去ナルコソ憂タテケレ。…寔  
ニ一世ノ英雄タル其身卑賤ノ業ヨリ起リ、陋巷ノ居ヲ  
離レ位万民ノ上ニ渴仰セラレ、威武六十州ヲ震ヒ靡カ  
スル而巳ナラズ。猶其餘勇ヲ盛ンニ興起シ民ヲ異域ニ  
驅リタテ、武ヲ万里ニ汚ガス事ニ至テ、大度ノ量ハ有  
リト雖トモ、仁君天心ノ道ニ於テハ最モ美ナラヌ処ナ  
ルカナ。然リトハ雖トモ英氣ノ剛ナルハ金鉄ニ争ヒ、  
広量逼ラサルハ雲漢ヲモ衝ヌベシ。哀レナル哉他邦異  
朝ノ人マデモ、サシモ畏レシ豪氣ノ華、虚シク一朝ノ  
風ニ散ハテ、榮枯ヲ半タノ露ニ争フ。

（『朝鮮軍記大全』巻三十七10「太閤薨去」）

「積姓貴は武將としての秀吉を「位万民の上に渴仰せられ」、「威武を六十州に震い」、さらには「異域」にまで攻め込んだとして、「大度の量有り」「広量」「剛なる英気」「豪気」と賞賛する。しかし、為政者としての秀吉を「仁君天心の道においては最も美ならず」と評している。一方、朝鮮の役については「民を異域に駆りたて」、「武を万里に汚す」戦争であつたとする。「武を万里に汚した」と総括しているが、この戦争に対する作者の見解を詳細に見てみよう。

秀吉は愛児棄君の夭折した後に出兵を思い立ち、「大丈夫」としての野心と「老いの鬱情をはらさん」とした動機を語り、神功皇后の三韓征伐時に朝鮮が誓約した毎年の朝貢を怠る朝鮮を誅さねばならないと思案したという（巻一15）。そのことについて作者は「ひとえに邪慢の天狗共、よき折を窺ひ、秀吉公の心中に入れ替て、障碍をなす」とぞ聞こえける（巻一16）」と記し、朝鮮出兵の企てが正気の沙汰ではないと見ている。

大老、中老、五奉行を集めての渡海の評議で、秀吉は出兵の意思を表明する。これに対して、諸將は互いに目

と目を見合わせ、言葉を発する人もなかつたとし、作者は諸將の心中を代弁する。

寔ニ數百年來ノ大乱：年々ノ戰鬪ニ父ニ離レ子ヲ殺シ、百姓ハ賦役ニカリ立ラレ、人馬非理ノ勞困ニヨツテ：漸ク去年ノ秋ヨリコソ暫ク太平ノ幾ザシヲアラハシ：見毛聞モセヌ人ノ國へ、怨ミモ起ラヌ兵戈ヲ動ジ赴ンコトハ、妻子ノ歎、父母ノ情マデ、一々思統ルホド、誰一人ノ意ニコレヲ宜ト思フベキ

（『朝鮮軍記大全』巻一18）

数百年にわたる戦乱によって、多くの民が傷ついた。漸く治まつたばかりの時期に、再び軍を起こして、「見もせぬ人の国へ、怨みも起こらぬ兵戈を動じ赴かんこと」は、妻子、父母の嘆きを惹き起こし、民を困窮させるばかりであるとして、「誰一人これを宜しき」と思う者はいないと批判する。

朝鮮の役の前線基地として築城した名護屋城は仮の城とはいえ、贅を尽した立派な建造物であつた。名護屋城普請の場面では、世間の人々の声を記す。

ヒトへ二太閤ノ御器量ノ廣キ、御威風ノ強トヲ以テ  
流石武功ノ人々マデ恐れ仰グガ故ニヨリ、何事ニテ  
モ其ノ御意ニ叶ハヌ事ノナキヲ見ヨト褒メノ、シレ  
ル者モアレバ、是非ノ理リ知ル人ハ、異域ニ兵ヲ  
弄ンデヨシナキ民ヲ怨鬼トナシ：国ノ費ノ大カクナ  
ラヌガ由ヲ以テ百姓大名共ニ近年困窮に指合セ、一  
朝ノ驕リトテ飯屋ノ普請ノ結構ハ、是ハソモ何事ゾ  
ヤト誇レル者モ多カリケリ

（『朝鮮軍記大全』巻三二）

誇る声、賞賛する声の両方を記すが、「是非ノ理リ知ル  
人」は誇る側に立ったとしている。釈姓貴は「異域に兵  
を弄んでよしなき民を怨鬼となし」、「国の費えの大方な  
らぬが由を以て百姓大名共に近年困窮に指し合わせ」、  
「一朝の驕りとして飯屋の普請の結構は、是はそも何事ぞ  
や」と、秀吉を厳しく批判している。批判の主旨は驕り、  
奢侈、民を軍旅の労苦と困窮に陥れたことに向けられて  
いる。或る老人の言説として間接的に著者の見解を示す  
手法は小瀬甫庵『太閤記』を踏襲するものであるが、小

瀬甫庵も太閤を誉めそやす人について「是心盲之人なり」  
と舌鋒鋭く評している。

秀吉卿古今に独歩したる主君かなと、誉る声のみ多  
し。是心盲之人なり。又似たるを友とせし老人二三  
輩、思ふ事無隔、云かはしつゝ、誹けるは、誠に此君  
は武勇智謀度量などの広き事は、離倫絶類之功あり。  
国病にしては、日本之賊鬼也。檢地をし侍りて、万  
人を悩し、兆民をせたげ、しぼり取て、其身の榮耀  
を尽せり。…伏見大坂之作事などは、善尽し侍りて  
も、聊はゆるす所も有ぬべし。これは仮の事なるを、  
万至極に及事、いかげあらんや。かやうの事を讀人  
は、千人に九百九十人也。反之誹る智は、甚すくな  
く見ゆ。

（『太閤記』巻十三「名護屋旅館御作事衆」三六一頁）<sup>(22)</sup>

慶長元年（一五九六）、明国との講和交渉が決裂する  
や、秀吉は朝鮮渡海の軍事の用意を命じるとともに、大  
地震で倒壊した伏見城の修復工事に当たさせた。この動  
員について、『朝鮮軍記大全』は次のように論評している。

伏見ニハサシモノ大勢アツマリテ、結構シタル城郭  
ヲ地震ノ為ニ撃崩サレタルヲ、今度山上ノ高キ処ニ  
引上ゲ、明ル正月ヨリ一日モ人歩ノ休息ヲモ免サズ  
セメ促シ、昼夜ノ隔ムナク是ヲ急ゲハ、人民ノ困窮  
国家ノ費、コレサヘ大方ナラザルニ再ビ朝鮮二兵ヲ  
出シ異域ニ武事ヲ勞スルハ、ソモ何事ノ量見ゾ。コ  
レヲ思フニ、唐日本ノ魔生トモガ、両国ノ地ヲ躁動  
サセ一朝ノ慰ニセント思フナルベシ。ソモ何処ノ  
杉原ガ寄集ツテ工夫所、何ノ天狗カ神通ニテ今此ニ  
秀吉公ト變シタルモ知ルヘカラスト、ツブヤキ恐レ  
ヌ者モナシ。 (『朝鮮軍記大全』二十八五)

『朝鮮軍記大全』は伏見城普請および朝鮮の役に動員される民の労苦と国家財政の負担を、「人民の困窮、国家の費」と言及する。異域に武事を勞することを、「唐日本の魔生ども」の仕業であり、「天狗」が秀吉に取り付いたもの、すなわち、狂気の沙汰であるとしている。しかし、「ツブヤキ恐レヌ者モナシ」とし、あらわに秀吉に諫言する者はいなかったとする。この論評は『太閤記』卷十三「名

護屋旅館御作事衆」と『朝鮮征伐記』卷五を継承したものである。

伏見の城郭去年閏七月十二日の大地震に崩れければ、別に又所を點じて、上の高みへ引き上げ、正月より十二月に至るまで、一日も休息させず、昼夜の境もなく急がせらる、天災と云ひ、人の労苦と云ひ、其上に又朝鮮に入らるゝ事は、仁政にあらずとつぶやく人あれども、あらはに諫むる臣はなかりける。

(『朝鮮征伐記』卷五)

『朝鮮征伐記』は「仁政にあらず」と評する根拠として、「天災」「人の労苦」「朝鮮入り」と、三点述べている。

天地の災変は天の意思(天命)の表れであり、天意に反する悪い政治をすると、罰として地震、洪水、旱魃などの災いを天が起こすというもので、災害を通して人間は誤りを教えられるという。したがって、このたびの大地震は、秀吉の悪政に対する戒告であったにもかかわらず、それを悟ることも無く、人々に休息もさせずに城普請に駆り出し、さらには、朝鮮の戦役に駆り立てることは「仁

政」にあらざ、悪政を重ねることだといっているのである。

## 2 『朝鮮太平記』の戦争評価

朝鮮渡海の評議では、秀吉の出兵意図を聞いた諸臣は賛意を示すしかなかったが、本心では誰も賛成しなかったとして、諸将の心中を代弁している。

諸臣ヲ集テ評議セラル。群臣皆心ニ思ハレケルハ、秀吉公、唯一人ノ御連枝、秀長卿ヲウシナヒ給フダ、二有ルニ、御寵愛ノ若君ニサヘ後レサセ玉ヒヌレバ、悲歎ノ切ナル余リ御狂乱シ給ヒテ、カカル事ハ宣フニヤ。頃年軍旅ノ勞、虚キ年ナク、諸士ツカレ万民クルシム。漸ク去年ニ至リテ既ニ息ミヌ。今又師ヲ外国ニ出サレバ、上下人民ノ困勞計ルベカラズ。実ニ秀吉公狂氣シ玉ヘルカト、列座静マリカヘリ、他ニ讓テ御返辭ヲ申ス人モナキ処ニ、備前宰相秀家浮田進ミ出テ申サレケルハ、…(中略)…其外ノ智臣モ秀吉公一身ノ勇智ニ慢ジ、忠臣ノ直諫ヲ用イ給ハザル処ノ心ヲ察シ、皆此義ニ同セラレシカバ、秀吉

公大ニ悦喜アリ

(『朝鮮太平記』卷三15「秀吉公朝鮮征伐評定事」)

天下久シク乱レテ万民居ヲ安ンゼズ。然ルニ近年、四国九州悉ク平均シヌ。東国ハ北條一家ヲ征伐アリ。今ハ日本六十余州豊臣家ノ威風ニ帰伏シ奉リヌレバ、諸人安樂ノ思ヒニ住セント始メテ喜ビ居ル処ニ、又思ヒノ外ニ朝鮮征伐ノ軍陣アリシカバ万民ノ歎キヤマサリケリ

(『朝鮮太平記』卷三17「秀吉公朝鮮征伐評定事」)

「朝鮮渡海の評議」の場面では、民の苦しみに着目して、批判的立場を示す。長きにわたる戦乱がやつと鎮まり、「諸人安樂ノ思ヒニ住セント始メテ喜ビ居ル処」であるのに、再び戦を起こすことは、「上下人民の困勞計るべからず」「万民の歎きやまさりけり」と批判する。朝鮮征伐を企てる秀吉については、「実に秀吉公狂氣し玉へるか」と評す。さらに、為政者としての秀吉を「一身ノ勇智ニ慢ジ、忠臣ノ直諫ヲ用イ給ハザル」と、批判する。

秀吉が名護屋城に着陣した場面では、いっそう厳しくな

秀吉公、其ノ身卑賤ヨリ出テ日本ヲ併呑シ、猶外侵ノ心ヲ発ス。容貌ヲ見ルニ曾テ貴人ノ相ニアラズ。色黒ク眼スドクシテ左ノ頬ノ上ニ数点ノ黒疵アリ、サナガラ猿ノ面ノ如シ。元来小男ニシテ、其長纒ニ四尺八寸、生得武勇謀離倫絶類ニシテ、古今ニ独歩シ玉フト云ヘドモ、覇権ノ術ニ暗マサレ、徳化ヲ以テ天下ヲ服スルコト能ハズ。仁義ヲ以テ兆民ヲ恵ムコトヲ知ラズ。嗚呼惜哉。

（『朝鮮太平記』巻四15 秀吉、名護屋着陣）

「日本ヲ併呑シ、猶外侵ノ心ヲ発ス」、すなわち、日本を併呑しただけでは満足せず、さらに外国を侵略しようとする秀吉を、「覇権ノ術ニ暗マサレ」と見る。秀吉の出自や「貴人の相」にあらざる容貌から、為政者の資質を具備していないことを裏付けようとする。「徳化ヲ以テ天下ヲ服スルコト能ハズ」「仁義ヲ以テ兆民ヲ恵ムコトヲ知ラズ」と、あるべき治者像によつて厳しく批判する。

### 3 仁政

これまで見てきたように、『太閤記』から『朝鮮征伐記』へ、さらに『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』へという継承の関係が明らかである。秀吉の朝鮮出兵を「民の困窮、国の費え」に陥れるものであるとして、「仁政」という観点からの為政者批判も継承されていることが明らかになった。『朝鮮軍記大全』巻一の冒頭は「豊臣秀吉公天下御成敗之事」で、天正一三年七月一日に秀吉が関白職に任官したことから始まる。まず、前田徳善院玄以、浅野弾正少弼長政、増田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、長塚大蔵大輔正家を以つて五奉行と定めて、国家の政を司らせ、諸奉行に政務の心得を訓示した<sup>(23)</sup>という。

万一不善ノ事ヲカマヘ、民百姓ヲ勞困セシムルノ政ヲナスベカラズ。小事アラバ一二人ニテ相計ルトモコレ可ナリ。群國ノ政治ノ相談ヲバ速ニ評議ヲナシテ折ベシ。公議遲滞ノコトアランハ、是民ノ困窮ス

ル本タルベシ。籠獄訴訟ヲ決断セバ慎ンデ聽サバキ、  
富ルヲ愛シ貧者ヲ輕ンズベカラズト。理世安民ノ政  
ヲ諸奉行ニ仰セ付ラル（『朝鮮軍記大全』卷一・二）

「民百姓を勞困せしむるの政を成すべからず」「公儀遲滯  
のことあらんは、是民の困窮する本たるべし」「富めるを  
愛し貧しき者を輕んずべからず」と、諸奉行に命じたと  
いう。釈姓貴はこのような治世を「理世安民の政」<sup>(4)</sup>と称  
している。釈姓貴は秀吉が関白任官の時には「理世安民  
の政」を標榜していたにも関わらず、天下をとつた後の  
治世は「仁君天心の道においては最も美ならず」（『朝鮮  
軍記大全』卷三十七）と評しているのである。

『朝鮮太平記』においても、「仁政」は終始論ぜられ  
た中心テーマである。大地震で大佛殿が崩落した時、秀  
吉は「汝方如キ用ニモ立ザル佛ヲ我信ズル事アルベカラ  
ズ」と、仏像に向かって弓を引いたが、その後、三年足  
らずのうちに秀吉は薨去したという（『朝鮮太平記』卷十  
七・二）。

秀吉公武勇古今ニ独歩シ天下ヲ知り玉ヒシカドモ、

仁モナク信モナク、民ヲ苦シメ百姓ヲシヘタゲ、身  
ノ榮花ヲ極メ、其余慶ヲ以テ仏像ヲ造立シ大伽藍ヲ  
建立シ玉フ。佛神非礼ヲ受玉ハズ、豈積悪ノ余殃ナ  
カラシヤト、諸人唇ヲ翻シケリ  
（『朝鮮太平記』卷十七・三「洛東大仏殿同仏像破壊事」）

「民を苦しめ、百姓を虐げ、身の榮華を極め」、その上、  
神仏を冒瀆した秀吉の悪行を数え上げる。もはや、為政  
者としての仁徳を失い、信頼も失墜した、「積悪の報いが  
無いはずがない」と諸人が語つたという。『朝鮮太平記』  
の大尾は次のような言葉で締めくくられている。

（内府公は）其外勲功アル人々ニ恩賞厚ク行レ、政  
道正シク、民ヲ恵マセ玉ヒシカバ、諸侯太夫ヨリ下  
万民ニ至ルマデ、其徳ニ歸シ奉リケリ  
（『朝鮮太平記』卷三十一）

秀吉と対比させて、「内府公」（家康）の威徳を賞賛す  
る。家康は「民を恵ませる」ことによって「徳に歸す」、  
すなわち、「徳化ヲ以テ天下ヲ服スル」ことができたと評

するのである。

『朝鮮軍記大全』においては、様々な問題について「仁政」という理念からの問いかけが行われている。その一例を挙げてみよう。戦争が勃発する前年、柳成龍が朝廷で日本との国交について語った言葉である。『懲毖録』の原文も示しておく。

夫レ事二因ツテ隣国ニ往来スルコト古ヘヨリ民ヲ保  
ツノ仁徳ヨリ免レザルノ例アリ

（『朝鮮軍記大全』巻二六）

余曰因事往来隣邦有國之所不免

（『懲毖録』巻一五）

「国を有つ」という語句を「民を保つの仁徳」と表現し、「仁徳」という語を付加している。隣国との関係を良好にして平和を維持することが、民の安寧を保つには不可欠である、平和を維持して民を慈しむ政を行うことこそ為政者の仁徳であるとする。釈姓貴は隣国朝鮮との良好な交わりに積極的な価値を見出している。原典である

『懲毖録』を「仁政」という観点から読み込んでいるのである。

#### 4 黷武

『朝鮮太平記』は秀吉の朝鮮出兵について「覇権の術に暗まされ、徳化を以って天下を服すること能はず」と評した。『朝鮮軍記大全』は「武ヲ万里ニ汚ス事」と評していた。「武を汚す（黷す）」すなわち、「黷武」<sup>(25)</sup>とは、道理にはずれた戦争をして武徳を汚すという意味である。これは戦争の質を問題にする評価であるが、小瀬甫庵『太閤記』、堀正意『朝鮮征伐記』には無かった視点である。朝鮮の役に関する『太閤記』の記述を見てみよう。

近き比秀吉公わづかなりし身なりしが天下平治し、  
朝鮮国をも退治し給ひて、富四海に周く海外に溢  
れしは、いかやうなる果敢決断の至れるにておはさ  
んや。（『太閤記』巻二十一「臣道」五八七頁）

されば秀吉公なども、初は嘗て武勇の沙汰もなかり



しか共、国器の才有とて挙用いしが、後は武勇智謀あくまで長じ、剩朝鮮まで随へ給ひき。

〔『太閤記』巻二十一「武」六二二頁〕

秀吉卿の才智は世に勝れ、殊に気体実せしに依て、去年の春備中に至り、出勢有しより以来、一日片時も休息のまもなく、遊興と云事をもよそに見、自他之労を尽されしにより、不期大利、而大利不意に至る事多かりしなり。此一労を能思へば、高麗まで達せしなり。

〔『太閤記』巻六「北庄表被寄陣事」一五二頁〕

寔に此二まきの智謀武功果敢決断得其所しに因りて、朝鮮まで脅かし、至于支竺、其威名有しとかや。

〔『太閤記』巻六「今度於柳瀬表有戦功者被賞之事」

一六〇頁〕

『太閤記』は朝鮮の役全体を「朝鮮を退治した」勝ち軍とみなし、刻苦奮闘の末に成し遂げた偉業と評価している。秀吉の権勢の拡大を「剩朝鮮まで脅かし」と賞賛

するのみで、覇権を振るうことに対する疑問はみられない。秀吉の行実に対する小瀬甫庵の批判の根柢は、驕りの果てに人民を虐げて自らの榮耀を尽したということにあり、武力で他国を侵略したことに対する批判意識ではない。

『朝鮮軍記大全』では「武を黷す」という言葉が明国軍将呉宗道によつて語られる。慶長三年（一五九八）九月、明軍大将劉綎は和議の会談と称して、行長を捕らえようと画策した。<sup>(26)</sup> 劉綎は小西行長の守る順天城を攻め取らんと謀計を思案して、間使“呉宗道を順天城に遣わして小西に和議を持ちかけた。呉宗道は「兵ヲ窮メ武ヲ黷スコト、古ヨリ智仁ノ警メ戒ムル所ニアラズヤ：（卷三十七）」と語つて、和議を説得したという。劉綎が順天城に“間使”呉宗道を遣わして小西と会見させたということは、『両朝平攘録』、『朝鮮征伐記』、『朝鮮太平記』にも書かれているが、「武を黷す」という説得の言葉は見られない。『懲愆録』には劉綎の謀計そのものが書かれていない。したがって、『朝鮮軍記大全』作者釈姓貴の創作した会話であると考えられる。釈姓貴は「武」あるいは「戦」とは何か、いかに用いればよいのかを、この書を通して

啓蒙しようとしたものと見られる。

井上泰至氏が「馬場信意は益軒から学んだ戦争の評価を教化の方向に利用した」<sup>(27)</sup>と指摘しているが、筆者も肯定する。『朝鮮軍記大全』や『朝鮮太平記』において、戦の質を問題にしたのは、和刻本『朝鮮懲毖録』の序文を書いた貝原益軒の影響が大きいのではないかと考える。

傳に曰く、兵を用いるに五あり。曰く義兵、曰く應兵、曰く貪兵、曰く驕兵、曰く忿兵。五の中、義兵と應兵とは君子の用いる所なり。傳に又曰く、國大なりと雖も、戦を好めば必ず亡ぶ。天下安らかと雖も、戦を忘れれば則ち必ず危うし。好と忘、二つの者以て戒めざるべけんや。曩昔豊臣氏之朝鮮を伐つは、貪兵に驕と忿とを兼ねたりと謂うべし。義兵と為すべからず。又已むことを得ずして之を用いる者に非ず、所謂戦を好む者なり。これ天道の惡む所にして、其の終に亡ぶるは、固より其所なり。

(『懲毖録』序文 書き下しは筆者による)

貝原益軒は『漢書』列伝「魏相丙吉伝第四十四」を引

用して、兵を五種に分類して論じた。「魏相丙吉伝」には「乱を救い暴を誅する、これを義兵といい、兵の義しき者は王たり。敵、おのを加し、やむを得ずして起つもの、これを応兵といい、兵の応ずる者は勝つ。小故を争い恨み、憤怒に忍びざるもの、これを忿兵といい、兵の忿る者は敗る。人の土地財宝を利るもの、これを貪兵といい、兵の貪る者は破らる。国家の強大を恃み、人民の衆多を衿り、威を敵に見さんとするもの、これを驕兵といい、兵の驕る者は滅ぶ」と記されている。これをふまえて、貝原は豊臣秀吉の朝鮮出兵は「貪兵」に「驕兵」と「忿兵」とを兼ねたものであり、「義兵」、すなわち、「君子の兵」ではないと批判していた。

## 5 朝鮮国土の荒廢

『太閤記』(寛永二・一六二五序文)においては、朝鮮に関する記述は朝鮮各地の戦闘で日本の兵将がいかに勇敢に戦い、勝利したかということに主眼が置かれ、朝鮮の民百姓については言及されていない。堀正意『朝鮮征伐記』には、明国史料『両朝平攘録』によって、明国軍

・朝鮮軍の動向と朝鮮の実態が記述されるようになる。  
しかし、それは、あくまで明国人の視点から記述したものであり、朝鮮人民の記述は詳細ではない。

次に引用するのは、『朝鮮征伐記』で朝鮮の惨状に目を向けられた唯一の記述である。文禄二年、日本軍が漢城から釜山浦に退いて太閤記の下知を待っていた時期、太閤が名護屋城にて家康、利家と評定するなかで、太閤が自ら渡海する意思を述べた。それに対して黒田如水が諫言したという。

黒田如水、垣越に聞いて申しけるは、最前朝鮮入るとき、家康、利家両将に一人遣はされ、萬事一人の下知より出でなば事ゆくべし、若し両将を遣はさるゝ事いかがと思召さば、軍の道を存知たる某を遣はされば、某を以て朝鮮人を懐け服すべきに、加藤、小西、猛く勇める若大将にて、其道を知らず、殊に兩人中悪しければ、小西が仕置をば加藤破り、加藤制札をば、小西用ひざれば、朝鮮の人民頼みなく思ひ、山中へ逃げ隠るゝばかりにて、安堵の思ひなし、日本人の通る三道は唯只赤土のみにして、青草一本

も無かりけり、其外人持の大名、文武の才幹ある人なし、今朝鮮亡国となりぬれば、やたけに思召すとも、国潰え民疲れて、其功成りがたかるべしと難ずれば、…。

（『朝鮮征伐記』巻之四「秀頼誕生太閤大阪の城に還り給ふ事」）

黒田如水は「朝鮮人を懐け服させる」ことのできない加藤・小西の軍政を批判するなかで、朝鮮山中に逃げ隠れる人民、青草一本絶え果てた国土の荒廃を語る。しかしそれは、「今朝鮮亡国となりぬれば…其功成りがたかるべし」という領地支配上の問題点の指摘であって、朝鮮の民に同情しての言葉ではない。

『懲愆録』移入後の『朝鮮軍記大全』、『朝鮮太平記』になると、朝鮮の人民の困苦に言及するようになる。次に示すのは『朝鮮軍記大全』（巻二十八〜九）「朝鮮国飢饉事」である。

日本ノ兵将ハ京城ニ抛ルコト既ニ二年マテニ及ビヌレバ、鋒戦ノ至ツトコロ、放火ノ煩ヲ被ルコト、凡

ソ千里ノ間ハ、民屋蕭然トサビカヘリ、田野荒ハテ、耕種ノ農業ヲツトムルノ百姓ハ、皆々山谷ニ逃カクレテモ、其食物ノ無キマヽニ、尽ク飢ヘ死シテ、遺レル者ノナカラントス。…(中略)：明將查大受ハ馬山ト云ヘル山中ヲ通ルトテ、二、三歳ノ小兒ノ、匍匐シナカラ、飢テ死シタル母ノ乳ヲサヲ飲ムヲ見ルニ、アマリニ忍ビ又哀レナレバトテ、軍人ニ命ジテ、此子ヲトリ収メ、軍中ニ連レ養育ヲナシメタルハ、情アリテゾ聞ヘケル。查大受ハ柳成龍ニ打向ヒ、朝鮮國ノ困窮、彼ホドマデニ至リ極ツテ猶倭ノ軍退カザル、マサニ是ヲ如何ンセンスルゾト云ヒヤンテ、二人ハトモニ不覺涙ヲ流シケル。

〔『朝鮮軍記大全』卷二十八〜九〕

時賊掘京城、已二年鋒焰所被、千里蕭然。百姓不得耕種、餓死殆尽。…(中略)：  
查總兵於馬山路中、見小兒匍匐、飲死母乳。哀而収之、育於軍中、謂余曰、倭賊未退而人民如此、將奈何乃嘆息曰、天愁地慘矣。余聞之不覺流涕

〔『懲毖錄』卷三十二裏〜十三裏〕

『朝鮮軍記大全』は『懲毖錄』をそのまま翻訳する形で記している。日本軍が京城を占拠して二年たち、兵禍をこうむった朝鮮の国土は荒れさびれ、百姓たちは種をまくことも耕すこともできず、多くの人が餓死した。查大受總兵は馬山への路中で、小兒が這いながら死母の乳を飲んでゐるのを見て、その子を軍中で育てたという。この話は『朝鮮太平記』にも収められている。『繪本太閤記』はこの情景を挿絵に描いている。

## 6 日本軍の暴虐

『朝鮮軍記大全』も『朝鮮太平記』も戦闘場面の記述が大半を占めるが、日本兵の勇敢さや兵法の優秀さを強調する。南原城攻撃場面では「本ヨリモ鳥銃ノ上手ヲエラミ出ルコトナレバ空矢ハ一ツモナカリケリ」(『朝鮮軍記大全』卷三十一・八)と記す。黒田勢の金海戦鬪では、「我先ニト城ニ込入ルニソ殺ルニモ射ルニモカマイナク、死人ヲ小楯ニ身ヲ防イデ…向カフトコロ只ニ破竹ノ勢ヒアリ」(同卷四十二)と、命を惜しまずに先陣を争う日本兵の

勇猛さと巧みな戦闘技術を称賛する。また、日本軍が朝鮮各地を攻め落とす様子を「城ヲ落シ邑ヲ掠ムル…」（同巻五七）という表現が慣用句のように使われ、進攻する先々の邑を焼き払い、妨げとなる者を斬り殺し、城を攻落す様を戦場の常の姿として記している。

しかし、敵の人民を恣意的に殺すことを無残なことから批判する視線もあらわれてくる。次に引用するのは、日本軍が京洛（王城）を撤退するときのことである。文禄二年（一五九三・宣祖二六年）、一月二四日、平壤の戦いに勝利した明提督李如松は漢城をめざして南下し、開城府に至った。漢城在陣の朝鮮人には明軍への内応の動きがあった。漢城在陣の日本軍は内応を恐れて朝鮮人を殺戮したという。「朝鮮王朝実録」および「朝鮮王朝宣祖修正実録」、『懲毖録』にも記されている。<sup>(28)</sup>『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』の記述を比べてみよう。

倡義使金千鎰馳啓曰、京都之民、已切思漢之心、  
争願内応、其数将至数千…（中略）…

必得統合兵力、撃去在外散処之倭然後、可以入攻内  
抛之賊、茲未挙事、方待機会

〔朝鮮王朝実録〕宣祖二六年正月丁丑

倭賊、大殺京城人、行長等、忿平壤之敗、且疑我人、  
外応天兵、尽殺都中民庶、惟女人免死、男子、或有  
扮着女服而免者、焚公私家舍殆尽

〔朝鮮王朝宣祖修正実録〕宣祖二六年正月

正月二十四日、賊疑我民為之内応、且忿平壤之敗、  
尽殺京城中民庶、焚燒公私閭舍殆尽而、西路列屯之  
賊、皆会京城、謀拒王師（『懲毖録』卷三七）

同ジキ二十四日、王城ニアル処ノ三奉行、京城ノ居  
民共、敵ト心ヲ合セテ内応ヲナサン事を畏レ、京中  
ノ人民ヲ尽ク切害シ、殿閣ヲ初メ、諸臣ノ閭舍ヲ焼  
払ヒ、西路二城壘ヲ列ネシ諸大名、皆王城二会合シ、  
明兵ト一戦ヲ遂ントゾ謀リケル

〔朝鮮太平記〕卷十一（五）

同二十四日、日本ノ諸大将、王城ニツボミケレバ…  
軍評定トリ、ナリ。…先立テ、…城中ノ民ト

モ、内応ヲナサントシテ、……是ヲ討ルユエ、遂ニ事ヲバ生サ、リシ。重テ又何如ナル禍ヲカエラン。兎ニ角ニ撃チ殺シテ、後ノ害ヲノコスベカラズトテ、京洛中悉ク焼タテ、公文所諸臣ノ亭宅ヨリ、是ヲ始トシ、坊壘村里ノ処々マテ、自焼シテ民人ヲ驅出シ、尽ク殺戮シタリケレバ、王城ノ民人残レルモノハ無リケリ。 偶々遁レテ助カルモノハ、皆山林ニ逃入りテ、今ハ京洛ノ其中ニ、朝鮮人ト云フ者ハ稀々ニ残リタリ。是等ハ皆、日本人ノ諸用ヲ達スベキ、其為ニ其筋タ、セル、安堵ノ者ト聞ヘケリ。

(『朝鮮軍記大全』卷十九4)

『朝鮮太平記』は『懲愆録』を翻訳したとおりの形で載せているが、『朝鮮軍記大全』は著者の評も付加している。日本軍は京洛(王城)を撤退するにあたり、王城に居住していた朝鮮の商人、農民、流浪民等の扱いについて諸将が評議したが、かれらが「味方ノ与力」とはなり得ず、明兵と内通して日本軍の退路を阻むのではないかと危惧し、かれらを皆殺しにしまったという。

日本軍は、朝鮮の役に際して、国内での場合と同様に、

侵攻した地域では住民に対して環住を促す「榜文」を掲示し、日本軍に下った朝鮮人に対しては兵糧の徴収と引換えに「帖」を発給して生命を保証し、日本軍の地域支配をある程度確立していった。<sup>29)</sup>

釈姓貴は、殺戮された者や、山林に逃げ入った者たちは、出入りや居住を承認された「日本人ノ諸用ヲ達スベキ、其筋タ、セル安堵ノ者」であつたと語る。日本軍はかれらの働きを享受していたにもかかわらず、「自焼シテ民人ヲ驅出シ、尽ク殺戮シタリ」と、諸将の行動を批判的な見解を込めて叙述している。

### むすびにかえて

『太閤記』、『朝鮮征伐記』から『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』まで、江戸初期・前期の朝鮮軍記は、秀吉の朝鮮出兵を否定的に評価した。その戦争は秀吉の驕りと狂気から企てられたものであり、自国の民を困窮させ、国家の財を無駄に費やすものであつたとして、「理世安民」、すなわち、撫民仁政という視点から批判した。

『懲愆録』移入後の『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』

には、戦争による朝鮮国土の荒廃、それにとまなう朝鮮人民の飢餓の惨状が記されるようになり、戦争相手の国民の困窮にも目を向けられるようになった。また、敵の人民を恣意的に殺すことへの批判も記されるようになった。それと同時に、「武を汚す」「覇権の術に暗まされ」という言葉に象徴されるように、戦争そのものを相対化して、その質を問う視点も見られるようになった。

『朝鮮軍記大全』および『朝鮮太平記』から『絵本太閤記』までおよそ一〇〇年間に隔てて朝鮮軍記の出版が再び活発になる。今後の課題として、江戸後期の朝鮮軍記がどのように為政者と戦争を評価するようになるのかについても検討していきたい。

【注】

- (1) 阿部一彦『『太閤記』とその周辺』和泉書院、一九九七年。
- (2) 初出は『近世文芸 研究と評論 第五〇号』早大文学部谷協研究室発行、一九九六年。
- (3) 井上泰至「通俗軍書作家馬場信意の誕生―『朝鮮太平記』を中心に―」『学苑』昭和女子大学、平成一九年度学会

講演・研究会、二〇〇七年一〇月。

- (4) (明) 諸葛元聲撰『明代史籍語彙刊5「兩朝平攘録」台湾学生書局、一九六九年、台湾国立中央図書館蔵本の影印本。
- (5) (明) 茅元儀編『武備志』二四〇卷八一冊、天啓一年(一六二一)刊。和刻本：大坂河内屋喜兵衛刊、鶴飼信之訓点。寛文四年(一六六四)甲辰涼月、洛陽隱士 石斎鶴子直訓点。
- (6) 中村栄孝「蓬左文庫の『朝鮮征伐記』古写本について」『名古屋大学日本史論集下巻』吉川弘文館、一九七五年。
- (7) 黒川真道編『国史叢書 朝鮮征伐記』国史研究会、一九一六年。
- (8) 黒川真道編『国史叢書 続撰清正記』国史研究会、一九一六年。
- (9) 中村栄孝「柳成竜家の壬辰・丁酉倭乱史料」『日鮮関係史の研究 中』一九六九年、吉川弘文館、昭和四〇年(一九六五)の稿。中巻五三九頁。
- (10) 貝原益軒『九州史料叢書 益軒史料一〜七』九州史料刊行会、一九五五〜一九六一。
- (11) 『朝鮮征伐記』巻七16「李順臣」、「兩朝平攘録」巻四20「水軍統制使李順臣」。
- (12) 宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林仲間記録』(書誌書

- 目シリーズ5)、ゆまに書房、一九七七、一五頁、影印。  
 弥吉光長『未刊史料による日本出版文化第一巻 史料編  
 京都書林行司上組済帳標目』(書誌書目シリーズ二六)、  
 ゆまに書房、一九八八、二〇二頁、活字翻刻。
- (13) 長友千代治「近世における通俗軍書の流行と馬場信武、  
 馬場信意」『説林』二五号、愛知県立女子大学国文学会、  
 一九五七年。同「軍書の読者」『近世貸本屋の研究』東  
 京堂出版、一九八二年。
- (14) 桑田忠親『太閤記の研究』徳間書店、一九六五年
- (15) 横田冬彦『天下泰平』講談社、二〇〇二年
- (16) 長友千代治 前掲書。
- (17) 引用は、国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。
- (18) 「清正記」『新訂増補史籍集覧9 武家部 家記編』臨川  
 書店、一九六七年、三五一頁。
- (19) 『絵本太閤記』第六編巻五
- (20) 『絵本朝鮮軍記』巻五第三章
- (21) 『絵本朝鮮征伐記』巻九第一章
- (22) 『太閤記 新日本古典文学大系60』岩波書店、一九九六  
 年。
- (23) 史実によれば、豊臣政権における五奉行という職制の成  
 立は一五九八年(慶長三)、秀吉が死去する直前と推定  
 されている。「天正一三年」に五奉行を制定したという

- 年次、そして、五奉行に与えた訓示の内容は、小瀬甫庵  
 『太閤記』巻七「五奉行之事」と、林羅山『豊臣秀吉譜』  
 (巻之中38)を継承している。
- (24) 「理世安民」という語は『太平記』巻一「関所停止事」、  
 小瀬甫庵『信長記』巻一之上「善元合戦の事」でも使わ  
 れている。
- (25) 白居易「辺功を賞せず武を黷すを防ぐ」
- (26) 「朝鮮王朝宣祖実録」(宣祖三十一年九月己丑)「蓋観提督  
 之意、托以講話相見、設策乘機、欲以捕獲」
- (27) 井上泰至、前掲書。
- (28) 北島万次氏は、「宣祖修正実録」のうち壬辰丁酉倭乱に  
 関する記述は『懲毖録』を参照しているところが多いと  
 指摘している。(『国史大辞典』)
- (29) 大田秀春『朝鮮の役と日朝城郭史の研究―異文化の遭遇  
 ・受容・変容』清文堂出版、二〇〇五年、二〇五頁。
- 【参考文献】  
 柳成龍『壬辰倭乱史料叢書 歴史 懲毖録』韓国国立晋州博物  
 館、二〇〇二。
- 柳成龍『朝鮮懲毖録』東北大学狩野文庫所蔵、大和屋伊兵衛刊、  
 一九九五。
- 朝鮮史編修会『朝鮮史料叢刊第二輯 草本懲毖録』朝鮮総督府、



一 九三六。

柳成龍・朴鐘鳴訳注『懲愆録』平凡社、一九九二。

『朝鮮王朝実録』韓国国史編纂委員会、影印。一九七一。

諸葛元聲『明代史籍彙刊』国立中央図書館蔵本『兩朝平攘録』

台湾学生書局、一九六九。

茅元儀編『武備志』東北大学狩野文庫所蔵、大坂河内屋喜兵衛

刊、一六二一。

林羅山『豊臣秀吉譜三卷』『將軍家譜』東北大学狩野文庫所蔵、

荒川四郎左右衛門刊、一六五八。

釈姓貞編『朝鮮軍記大全』全三八卷、東北大学狩野文庫所蔵、

一七〇五。

堀正意『朝鮮征伐記』全九卷、内閣文庫所蔵、大和屋伊兵衛刊、

一六五九。

堀正意『朝鮮征伐記』全九卷、宮城県図書館伊達文庫所蔵、写

本。

黒川真道編『国史叢書』朝鮮征伐記』国史研究会、一九一六年。

黒川真道編『国史叢書』統撰清正記』国史研究会、一九一六年。

『朝鮮征伐記』通俗日本全史』早稲田大学出版部、一九一三。

岡田玉山撰並画『絵本太閤記』全八四卷、東北大学狩野文庫所

蔵、勝尾六兵衛刊、一七九七—一八〇二

秋里離島『絵本朝鮮軍記』全一〇卷、八戸市立図書館、三、出

雲寺文次郎・松本平助、一八〇〇。

鶴峯彦一郎校正『絵本朝鮮征伐記』前編十卷』静岡県図書文庫

所蔵本、三、菊池氏蔵版、一八五三。

鶴峯彦一郎校正『絵本朝鮮征伐記』後編十卷』国会図書館所蔵

本、三、萬笈閣刊、一八五四。

馬場信意『朝鮮太平記』全三〇卷、盛岡市中央公民館所蔵本、

三、柏屋四郎兵衛、一七〇五。

小瀬甫庵『太閤記』全二二卷、東北大学狩野文庫所蔵、吉文字

屋庄右衛門刊、一六五九。

小瀬甫庵『太閤記』新日本古典文学大系60』岩波書店、一九九

六。

横田冬彦『天下泰平』講談社、二〇〇二。

北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館、一九九六。

北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、一九九

八。

中村榮孝『日鮮関係史の研究』上・中・下』吉川弘文館、一九

六九。

貝原益軒『九州史料叢書』益軒史料一〜七』九州史料刊行会、

一九五五〜一九六一。

貝原益軒著／川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『黒田家譜』

文献出版、一九八三。

桑田忠親『太閤記の研究』徳間書店、一九六五。

中村幸彦「未刊随筆談」『中村幸彦著述集』中央公論社、一九八三。

中村幸彦「絵本太閤記について」『中村幸彦著述集第六巻 近世作家作品論』中央公論社、一九八二。

崔官「朝鮮軍記物の展開様相についての考察」『語文』第一一八輯、日本大学国文学会、二〇〇四。

崔官『文祿・慶長の役〔壬辰・丁酉倭乱〕文学に刻まれた戦争』講談社、一九九四。

宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林仲間記録5』ゆまに書房、一九七七。

弥吉光長「未刊史料による日本出版文化1」ゆまに書房、一九八八。

長友千代治『日本書誌学大系52 近世の読書』青裳堂書店、一九八七。

長友千代治「近世における通俗軍書の流行と馬場信武・信意」『説林25』愛知県立女子大学国文学会、一九七六。

今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』日本放送協会、一九八三。

今田洋三『江戸の禁書』吉川弘文館、一九八一。

中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、二〇〇四。

藤本幸夫「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて―天和三年目録」と現

存本を対照しつつ―』『朝鮮学報』第九九・一〇〇輯、一九五―二二四頁、一九八一。

市古夏生『近世初期文学と出版文化』若草書房、一九九八。

『国宝 漢書 宋慶元本』朋友書店、一九七七。

小竹武夫訳『漢書』筑摩書房、一九七九。

浜田啓介「絵本太閤記と太閤真蹟記」『読本研究新集 第一集』翰林書房、二〇〇〇年。

阿部一彦『太閤記とその周辺』和泉書院、一九九七。

阿部一彦『近世文芸 研究と評論 第五〇号』早大文学部谷脇

研究室発行、一九九六。

井上泰至「通俗軍書作家馬場信意の誕生―『朝鮮太平記』を中心に―」『学苑』昭和女子大学、平成一九年度学会講演・研究会、二〇〇七年一〇月。

朴賛基『朝鮮軍記大全』の壬辰倭乱記述と『懲毖録』『日本学報』第四七輯、日本学会、韓国、二〇〇一。

大田秀春『朝鮮の役と日朝城郭史の研究―異文化の遭遇・受容・変容』清文堂出版、二〇〇五。

朝鮮軍記諸本の所在

国文学研究資料館データベース「日本古典籍総合目録」より引用

堀正 著『朝鮮征伐記』

No.	調査	所蔵	巻数・冊数	印記・旧蔵者等
101	○	内閣文庫 168-63	9巻5冊	刊
102	○	内閣文庫 168-61	9巻9冊	刊 昌平坂学問所 林氏蔵書 浅草文庫
103	○	尊経閣文庫	9巻9冊	刊
104	○	宮城伊達文庫	9巻3冊	写 印記:「璧」
105		石巻市立図書館	8冊	
106		岩国徴古館	9巻9冊	刊
107		臼杵図書館	2冊	写 伝来(稲葉家旧蔵)
108		杵筑市立図書館	2巻2冊	写 外題「朝鮮記」
109		福島県歴史資料館	第1巻外欠	写
110		肥前松平文庫	2巻2冊	写
111		影考館	2冊	写
112		福島県図書館	5冊	写 <序> 享和元年 青水造酒清原宣久
113		武雄市鍋島	2冊第7、9巻外欠	写 <伝> 茂紀印
114		石川県歴博大鋸	1冊第1～4巻存	刊
115		伝習館高安東	9巻9冊	刊 「柳城文庫」「郷土文庫」
116		国文学研究資料館	9冊	刊 「をばま」「西荘文庫」「福寿蔵書」「一弥精玩」「岩本氏珍藏」

釈姓 貴著『朝鮮軍記大全』

201	○	東北大狩野	38巻序目1巻附2巻23冊	刊
202	○	内閣文庫 168-006	20冊	刊
203	○	内閣文庫 168-009	15冊	刊
204	○	内閣文庫 168-009	15冊	刊
205		岡山大小野	38巻序目1巻附2巻23冊	刊
206		対馬歴史宗家	39冊	刊
207	○	酒田光丘	8冊	刊 「本間氏図書」「両室堂」 「京都聖護院嶋田氏文益堂」
208		大州市図矢野	5冊	刊
209		日本福祉大草鹿	巻4～6欠17冊	刊
210		津市図有造館	12巻序総目録1巻附2巻15冊	刊 「復古堂図書記」 「有造館記」「津県文庫」
211		東洋大哲学堂	38巻19冊	
212		伝習館高対山	38巻8冊	刊 「官本」「郷土」 「郷土文庫」「伝習館郷土文庫」
213		東洋文庫岩崎	38巻附録2巻13冊	刊
214		九州大学	序目38巻附2巻20冊	刊
215		筑波大	38巻目1巻附録2巻20冊	刊 「嵯峨支流渡邊文庫」
216		陽明文庫	22冊	刊
217		諫早市図	8冊 1-3,5,6,11,12,17,18, 21-24,27巻存	刊
218		諫早市図		
219		諫早市図		
220		東京大総合図	20冊	
221		大宰府天満宮	38巻目録附録共15冊	
222		国会図	38巻附録2巻20冊	刊
223		宮内庁書陵部	附録共20冊	刊
224		鹿児島大玉里		刊
225		京都大		刊
226		東京教育大		刊
227		慶応大		刊
228		栗田文庫		刊
229		広島市浅野図		刊
230		日比谷図	附録2巻1冊	刊 中山久四郎旧蔵

馬場信意著『朝鮮太平記』

301		国会	巻2、3、1冊	刊	
302	○	内閣文庫 168-62	30巻、15冊	刊	寛政7(1795) 著屋儀兵衛
303	○	内閣文庫 168-99	巻九欠、14冊	刊	徳川家達献本
304		京大		刊	
305		教大	30巻、31冊	刊	
306		筑大		刊	
307		高知	30巻、30冊	刊	
308	○	宮城養賢堂	30巻、15冊	刊	文政癸未(1823)
309		米沢興讓	巻9欠、29冊	刊	
310		大橋	15冊	刊	
311		栗田	30巻、8冊	刊	
312		茶岡成箕		刊	
313		旧浅野		刊	
314	○	宮城伊達	30巻、31冊	刊	「伊達伯観瀾閣」
315		延岡内藤家		刊	
316		岡山大池田	巻9、10欠、14冊	刊	
317		盛岡公民南部	15冊	刊	
318		京大大惣本	15冊	刊	
319		岩国徴古	15冊	刊	
320		対馬歴史宗家	序巻、巻2、7~18、21~30存、26冊	刊	
321		矢口米三	15冊	刊	
322		土佐山内家宝資	17冊	刊	
323		諫早市図	15冊		
324		石巻市図	10冊	写	
325		岩村町公	30冊	刊	

秋里籬島著『絵本朝鮮軍記』

401		八戸図南部	2冊	刊	
402		津山郷土愛山	10巻10冊	刊	「鶴山樓図書記」「弦齋図書」 「絵本太公記八編」:外題
403		豊科町郷博桂谷	1冊	刊	
404		三春町歴民資	第5冊欠9冊	刊	
405	○	三康図 5-69,K	10巻10冊	刊	
406	○	三康図 竹5-23,K	3冊	刊	
407		八戸図	2冊	刊	
408		長崎勝憲	1冊	写	
409		宝山寺	10冊	刊	
410	○	東京・加賀文庫 1676		刊	堺川尻山家屋利兵衛
411	○	東京・加賀文庫 8248		刊	堺川尻山家屋利兵衛

鶴峰彦一郎校正『絵本朝鮮征伐記』

501		京都大清家文庫	前編10巻10冊	刊	
502		静岡県図葵文庫	前編10巻10冊	刊	
503		東洋大哲学堂	20巻20冊	刊	
504		九大六本松図松垣	前後編20冊	刊	
505	○	三康図	2編20巻10冊	刊	「常宮御殿」、「竹田宮家所蔵」
506		国学院	5巻5冊	刊	
507		栗田文庫	前後編20冊	刊	
508		栃木県図黒埼	10冊	刊	
509		国会図	前後編20巻20冊	刊	

岡田玉山撰並画『絵本太閤記』

601	○	宮城伊達文庫 (1)	82冊存欠2冊	刊	「伊達伯観瀾閣」
602	○	宮城伊達文庫 (2)	不揃 7編12冊のみ完全	刊	「伊達伯観瀾閣」
603	○	三康図 5-67	84巻	刊	「静貴文庫」「北河」
604	○	三康図 竹5-20	84巻	刊	「たかさき 京 藤」
605	○	三康図 竹5-21	24冊存	刊	
606	○	三康図	84巻 合冊	刊	
607	○	内閣文庫	初編12巻6冊	刊	明治15版 頭書増補
608	○	東北大狩野	84巻84冊	刊	

二〇〇八年一月一五日受稿  
 二〇〇八年二月一三日をレフエリを経て掲載決定